タクシー

石子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タクシー

【Ｎコード】
Ｎ９８４３Ｆ

【作者名】
石子

【あらすじ】
男の前に一台のタクシーが停まった。ガイドだと言う女性の言葉に従い、男はそのタクシーに乗り込む。

男の前に、静かに一台の緑色のタクシーが停まった。
男は周りを見るが自分以外には誰も見当たらない。
手をあげてはいなかったはずだ。彼はタクシーを待ってはいなかったのだから。
ぼんやりと、停まったタクシーを眺めていると、中から後部座席のドアが開けられる。
「佐藤さんですよね？」
中から顔を出したのは若い女性だった。愛嬌のある、親しみやすい顔立ちの女性だ。
男は記憶をたどってみたがこの女性に見覚えはない。
「……はい。そうですけど」
とりあえず素直に答える。
「じゃあ、乗ってくださいね」
軽い口調で言ってドアをさらに大きく開けると、佐藤が乗れるように自分は体を奥に移動させた。
「はぁ……」
いきなりのことに当然ながら躊躇したが、早く乗ってくれと言わんばかりの女性の視線にぶつかる。
「あの……。あなたは？」
「え？　私ですか？　ガイドですよ、ガイド」
当然の事のように答える彼女に、そういうものかもしれないと思い、佐藤はタクシーに乗り込んだ。シートに腰を落ち着ける。
「……」
「ドア、手動なんで。自分で閉めてください」
「ああ。すいません」
運転手の無愛想な声に、佐藤は慌ててドアを閉めた。前を向いているのでよくわからないが、運転手の男はその無愛想な声に負けな

いくらい仏頂面をしているようだ。
そして、ドアが閉まるのとほぼ同時に車は走り出す。行き先はわかっているのだろう。
佐藤は手に持っている、リボンの掛けられた赤いラッピングの箱を見た。両手で包み込めるくらいの大きさの物だ。他には何も持っていない。
ガイドに声を掛けられるまでは、それを食い入るように見ていた。
「それ、大事なものなんですか？」
佐藤はゆっくりと顔を上げる。なんと答えたらいいか迷っている様子だった。
「いえ。大事、というか……。実は今日、娘の誕生日なんですよ」
バツが悪そうにそう言うと、もう一度赤い包みを見る。
「なるほど～。それ、誕生日プレゼントなんですね？」
「はい。まぁ……」
「……もしかして、家で誕生日パーティー、とか？」
「いえいえ。そんなこと、ここ何年もしてないですよ。今は高校生なんですけど、中学生くらいからはね、もう私のことなんて全然慕ってくれてなくて。友達と過ごす方が良い、って」
佐藤はため息まじりに言葉を吐き出した。ガイドはそんな佐藤の横顔をちょっと眺めて、まだ言葉が続きそうだ、と口を挟まずに続きを待った。
「最近は、妻と一緒になって、私のことは『おっさん』呼ばわりですよ。会話もね、こっちが何か言ったことに対して、無言でいるか『いいんじゃない？』か『ばっかじゃないの？』だけで成立しちゃって」
ガイドはその様子を想像して、笑いそうになるのを咄嗟にがまんした。もちろん本人にとっては深刻な事態だろうが、傍から見るとちょっと滑稽だ。
「もうそれに慣れちゃって、そのままでもいいかななんて思ってる私も悪いんでしょうけどね。ほんと、ダメな父親なんですよ」

眉を八の字にして弱々しく笑う佐藤は、確かに情けない。
それでも、ガイドには彼が家族のことを大事に思っていることは伝わってきた。
「でも、ちゃんと誕生日プレゼント買ってあげたんでしょう？」
「ええ。まぁ。いや、ほんと気まぐれと言うか、魔が差したというのか……。いつもは商品券とかあげてるんですよね。小さい頃はおもちゃとかをね、妻とも一緒に見に行って買ってたんですけど。……年頃の女の子に何あげていいかわからないですし。妻は娘と仲良いんでアクセサリーなんかをあげたりしてるみたいですけど、私のようなおっさんには可愛いものを選ぶセンスもなくってね」
照れたように頭を掻く。確かにぱっとしない佐藤の出で立ちを見て、ガイドは「そうでしょうねぇ」と思わず相槌を打ちそうになったが、それを慌てて呑み込んで別の質問をした。
「えっと。じゃあ、その赤い包みは？」
「実は会社帰りに通る商店街で、たまたま店頭に並んでたんですよ。……オルゴール」
「オルゴール？」
「ええ。普段はそんなもの目にもはいらないんですけどね。なんとなく手にとってみたら、娘が小さい頃に一緒に見ていたアニメの曲だったんですよ。急に懐かしくなっちゃいましてね。……娘の方はもうそんなの覚えてないとは思うんですけど、つい買っちゃいました」
「へぇ」
「……あっ！　もちろんいつも通り商品券も用意してたんですよ！？　これだって買ってみたものの、渡そうかどうか迷ってたくらいで」
「そうなんですか？」
「きっと、オルゴールなんて最近の子は聴かないでしょう？　どうせ、ダッサいなぁとか思われるだけだってわかってるんですよ、私だって」

「ダッサいですかねぇ？」
「ダッサいですよ」
「う～ん。ダッサいかもしれないけど、素敵ですよ」
ガイドのその言葉に、佐藤は驚いたように彼女を見た。ガイドは、意外そうな表情で自分を見る佐藤の方ににっこりと笑顔を返す。
「ありがとう」
佐藤は、つぶやくようにそう言うと、また手の中のオルゴールに視線を落とした。
ガイドはふと外の景色に目を移す。もう日が落ちて薄暗くなった街の景色が飛ぶように後ろに流れていく。
「でも、結局なんにもしてあげられなかったんです」
佐藤がもらしたその小さなつぶやきは車内に大きく響いた。
ガイドは彼の方を振り向く。包みを持つ彼の手は小刻みに震えていた。
「佐藤さん……」
「気がついたら病院だったんです。私自身がベッドに横たわっているのがはっきり見えた。その傍らに妻と娘がいて、私を揺り起こそうとしていたんですよ。二人とも泣いてました。私なんかのために」
佐藤の目から涙が幾粒か落ちた。それは赤い包みのリボンのところに挟んであったメッセージカードを濡らす。恐らくオルゴールを買ったときに店頭で佐藤が書いたのだろう。『恵理へ』と書かれた文字が少しにじんだ。
「声も届かない、二人に触れようとしてもできない。……いつも役立たずの私なんて死んだって別にいいかなって思ってたんですよ。誰も悲しんだりしないだろう、って。でもね、死ぬってこういうことなんだな、って。情けないやら、悔しいやら」
ガイドは彼の方を見つめた。
「車に撥ねられて呆気なく死んじゃうなんて、私にはお似合いかもしれません。でもね、妻と娘を悲しませることしかできなかったことが辛いんです」

ぐっと力を入れて包みを握り締める佐藤の手から、ガイドはそっとそれを取り上げた。
「これは、確かに私がお預かりしますね。佐藤さん、きっと奥さんにも娘さんにもあなたの想い、伝わってますから」
心から、そう思う。
佐藤は両手を膝の上で硬く握り締めたまま、小さくうなずいた。

雨が降ってきたようだ。
恵理は雨音に気付き、ゆっくりと顔を上げて窓の外を眺めた。先ほどまで散々泣いていたのでまぶたが腫れて少し重い。
彼女は一人で病院の廊下に設置してある長椅子に座っていた。一緒にいた母は医者に呼ばれたため、「すぐに戻ってくるから」と言い置いて今はそばにいない。
最悪の誕生日だ。
つい何時間か前までは、誕生日会と称して友達とカラオケボックスで盛り上がっていたのに。
父が事故に遭ったからすぐ病院に来て欲しい、と母から携帯に連絡があった時には正直面倒だと思った。事故だなんて言っても、ちょっと怪我したくらいじゃないの？　ほんとトロいんだから、と。
恵理が病院に到着した時には、もう父は息を引き取っていた。
あんなに、普段鬱陶しいと思っていたのに。いなくなっちゃえばいいと思っていたのに。
横たわる父を見て、訳もわからず、ただ涙が止まらなくなった。
少し落ち着いたのを見計らって、看護士が恵理と母をこの椅子に座らせてくれたのは覚えている。
夢の中にいるような気分。重い、暗い夢だ。
「恵理さん、ですよね？」
突然降ってきた声に、顔を上げると、人懐っこそうな印象の女の

人が立っている。
誰だろう？　白衣は着ていないが病院の人、だろうか。
恵理はただ黙ってうなずいた。
「はい。これ」
目の前に赤い紙でラッピングされた包みが突き出された。
「え？」
「……これ、佐藤さんが事故に遭われた時に飛ばされたのか、近くの木の上に引っかかっていたみたいです」
恵理は恐る恐るその包みを受け取った。『恵理へ』と書かれたカードがついている。降りだした雨にでもあたったのかその字は少しにじんでいたが、父のものだ。
カードの裏には、きれいとは言えない父の字で「ハッピーバースディ」と、それだけ書かれている。こんなもの書いたことがないのだろう。それでも何か書こうと一生懸命考えて、結局ありふれた言葉を選んだのかもしれない。不器用な父らしい。
包みを開けようかどうか、彼女は迷っていた。そんな気持ちを見透かすように、女性が声を掛けてくれた。
「開けてみてはどうです？」
恵理は、やはりただうなずくと、慎重にその包装紙を取り除いていく。中から出てきた箱に入っていたのは……
「オルゴール？」
取り出して、少し不思議に思った。
今までの誕生日には何かプレゼントを買ってくることなんてなかったのに。
そう思いながらもオルゴールのふたを開けてみる。　中からオルゴールのやさしい音色が流れてきた。雨音と調和するかのように廊下にメロディが溢れる。
最初は何の曲かわからなかったが、旋律をたどっていると記憶と共に鮮明になった。小さい頃、父と見たアニメ。よく一緒に歌を歌ってくれた。

再び理恵の目からは涙が流れ落ちていた。
「……あのおっさん、ばっかじゃないの？」
思わずこぼれたのはそんな言葉だったけれども、恵理の口元にはやさしい笑みが浮かんでいた。
オルゴールを持ってきてくれたお礼を言っていないことに気付き、顔を上げたが、その時にはもうどこにも女の人の姿はなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9843f/

タクシー

2010年10月8日15時52分発行